

「にーはお」トイレと小皇帝

岡本信広(中国)

中国をはじめて旅行して驚くのは、やはり「にーはお」トイレであろう。いわゆる穴のみで、見たくないが、他人の排泄行為の姿・形・表情すべてが観察できるトイレである(つまり、挨拶ができるという意味で「にーはお」である)。それでも穴のみのトイレも少なくなり、一応大人の腰ぐらの高さの壁がついたトイレも増えてきている。現在の観光地では基本的に入口でお金を払うものの普通のトイレになってきている。

一九八七年にはじめて中国を旅行した。当然水が変わればお腹の調子も変わる。水戸の「黄門」様が出番でもない状況のなかで、「この印籠が目にはいらぬか」と私のお腹に「印籠」をつきつける。そんなこと言われても……と思いつつ、「印籠」が私を腹痛の極致においこんでいく。トイレをさがしていると、突然中国人が何か道でも聞きたいらしく「同志! 同志!」と僕を呼びとめる(当時まだ人を呼ぶのに同志というのが一般的であった)。「我不是你的同志!」(「俺はあんたの『同志』じゃねえ」とお腹を押さえ、まったくこんな時に「同志」どころじゃねえぞとぶつぶつ思いつつ、トイレを探して駆け込んだ。とりあえず一応腰までの高さの壁がある。

「黄門」様が出終わる頃、何人かの中国人がやはり用をたしにトイレに入ってきた。他のトイレでは平然と用をなさっている中国人たちである。早く終えて出ようと思いつきはじめる。順番を待っている中国人たちが私の周りに集まり終わるまでじっと見ているのである。これは大きなカルチャーショックであった。

中国の子供たちは、一人っ子政策のもと両親と四人の祖父母たちの期待を一身に受け、大事に育てられている。いわゆる「小皇帝」である。テレビゲームやパソコンを買い与えられ大事に育てられている割にはトイレ教育はワイルドである。街を歩いていると「小皇帝」は切れ目のついたズボン(「開裆褲」)を履いているのである。穴といつても前のチャックの部分から後ろのおしりの上まで切れ目が入っているといったものである。

この切れ目付きズボンの利点はどこでも大小便ができるという点である。中国人の話によると、二才ぐらいにおむつを卒業したあと、切れ目付きズボンを利用するようになる。実際北京の街角の街路樹の下では切れ目付きズボンをはいた子供の大小便のあと始末をしている親の姿をみる事ができる。また結構遊びに夢中になって自分が

大小便を忘れてしまうこともあるそうである。このことからすでに人前での大小便を経験していくのである。一方日本の子供も同じくらいでおむつをとったあとは、トイレに連れて行かれ用を足すように教え込まれていく。

ちなみに中国では依然布おむつが一般的である。一方日本では紙おむつが主流であり、一回あたり五〇円ぐらいの豪華な(?)大小便をしているのである。いくら「小皇帝」といえどもおむつに金をつぎ込むほど中国人は非合理的ではないらしい。

ところでこの間北京の街角のレストランで食事をした。用がもよおしてきたのでトイレを尋ねると、となりの胡同(フートン)の中の公衆トイレを使えと言う。いやな予感がする。予感の中であった。薄暗いトイレに入ると、穴にまたがった十代前半の女の子が叫び声をあげることもなく、平然と私の目を見つめていた。さすが中国の「小皇帝」、堂々たるものである。この文化に同化していけるかどうか—これがこれからの私の中国研究の課題である。

(おかもと のぶひろ/統計調査部統計

企画解析課)